

昨年度を振り返って

理事長 長谷川 憲 治

昨年度を振り返りますと、2年連続での「コロナに振り回された1年」と言っても良いのではないかと思います。前前年度の期末に、コロナ感染拡大防止の緊急事態宣言を受け電話相談活動を休止せざるを得ないという事態に陥り、昨年度も期首から電話相談活動が休止という山形いのちの電話始まって以来の異例なスタートとなりました。それでも、相談員の方々の高い志と使命感、事務局員の皆さんの懸命なコロナ対策活動により、約一か月の相談活動の休止のみで活動を再開し、以来休まずに活動を続ける事が出来ました。相談員の皆さん、事務局員の皆さんに深く敬意を表しますと共に、心から感謝申し上げます。

しかし、暦年での電話相談受信件数は6,464件に留まり、前年度の7,240件から776件の減少（▲10.7%）となりました。コロナの影響による相談活動停止の影響は大きいと改めて実感します。加えて、多くの研修会や会議等が中止や延期になり、又書面決議等を余儀なくされましたし、後援会の目玉事業であります「チャリティーコンサート」も2年連続で中止せざるを得ませんでした。今年度こそは、コロナを克服し相談活動を休止する事なく、研修会や会議等も実施した上で、「チャリティーコンサート」も是非成功裏に行きたいと準備を進めているところであります。

課題であります相談員の確保も、6月18日に新たに10名の相談員が認定を受けられ合計98名となりました。念願の100名体制まで後一步となり、来年度中には達成したいものだと願っております。

又、コロナは思わぬ副産物ももたらしました。コロナ禍における「いのちの電話」の活動に対する援助金として、赤い羽根より合計60万円、日本財団より250万円の補助金を頂き、設備や備品の充実を図る事が出来ました。加えて、この厳しい経済環境にも拘わらず、「いのちの電話」に寄付をして下さる企業や団体が増えてきております。「いのちの電話」の意義へのご理解が進んでいる表れかと思いますが、二重の意味で嬉しく感謝申し上げます。

今年度は引き続いてのコロナ対策や相談員の募集と充実、加えて老朽化した事務局問題への対応等課題は山積しておりますが、コロナ禍での自粛生活で孤立しておられる方、困窮しておられる方も増えてきておりますし、残念ながら自殺者も増えております。「山形いのちの電話」の意義・役割は益々高まると思います。これからも「悩んでおられる人々に少しでも寄り添い、お役に立てれば」との想いで活動を続けて参りますので、変わらぬご理解とご支援を宜しくお願い申し上げます。

いのちの電話の目的

いのちの電話は、孤独の中にあつて、時には精神的危機に直面し、自殺をはじめ、助けと励ましを求めている一人一人と、主に「電話」という手段で対話することを目的とする。